

Newsletter

June 2015

<http://www.aack.or.jp>

目次	
積雪期知床遠征 60 年の変遷 —同志社・京大山岳部の歩み— 平井一正、高村奉樹……………1	書評 「南極日和」 実業之日本社 平井一正……………8
岡山の山、2014 年晩秋の若杉原生林と 日名倉山 永田 龍……………6	会員動向……………9
	原稿募集のお知らせ……………9
	第 33 回雲南懇話会のお知らせ……………10
	編集後記……………10

積雪期知床遠征 60 年の変遷

—同志社・京大山岳部の歩み—

平井一正、高村奉樹

京都大学学士山岳会主催の標記講演会が、2015 年 2 月 14 日（土）15 時より楽友会館大講堂において開催され、本会会員のほかに同志社大学、関西学院大学山岳部 OB をはじめ、日本山岳会京都・滋賀支部および関西支部会員諸氏を含む約 60 名の参加をえて盛況裡に終了しました。以下概要を記します。（文中敬称略 文責 平井一正、高村奉樹 ただし、氏名（記）とあるのは本人筆を示します。）

1. 開会挨拶 松林公蔵会長

半世紀以上もまえに、先輩によって行われた厳冬期知床遠征は、日本の登山史上たいへん意義ふかく、また以後の京大山岳部、学士山岳会の発展の基盤になりました。このたび、若い大学山岳部員による積雪期知床への最近の挑戦報告を聞くとともに、当時を振り返る講演会を開きましたところ、関西学院大学、同志社大学山岳部 OB の方がた、さらに近隣の日本山岳会会員のご参加をいただきました。今後の山岳部のあり方にも示唆を与える価値のある会合になることを祈ります。

2. 京大知床遠征の成功とその後

知床隊員 斎藤惇生（記）

2014 年 4 月、日本山岳会京都・滋賀支部の年次総会で、前年 3 月の同志社大学山岳部の知床半島縦走の報告を聞いた。計画を立案した小谷紘平君が報告したが、彼は京都の山岳界の大先輩でディラン峰、コングール峰登山隊の隊長だった小谷隆一氏の直孫になる。3 人の隊で羅臼平から稜線に沿って下り知床岬に至り、そのあと断崖の続く東海岸を踏破して合泊に達した。輪かんをはき雪洞イグルー泊のユニークな隊であった。

私は 1952 年の京大山岳部の厳冬期知床遠征と比べ思い浮かべながら懐かしく聞いたが、小谷君に提案して今回の合同報告会が実現した。かつて私は AACK ニュースレター 36、37、38 号で「知床遠征をふりかえって」と記憶にあることを書留めている。その当時冬の知床先端部は、全く未知の空白地帯だった。京大山岳部の成功後、登山界にやっと知床が認識されたのだった。

京大のあと、先ず 1959 年に関西学院大学山岳部が羅臼岳より岬への縦走に成功した。同時期に北海道教育大学の片岡胖氏は、岬より海別



写真 1 講演会場

岳までスキーによる単独完全縦走をしている。京大より 10 年後の厳冬期に、北海道大学山岳部は新妻徹隊長以下 3 人が、知床岳より羅臼岳へスキーによる縦走に成功した。その後の厳冬期縦走の記録については知らない。1965 年 3 月、岡山大学山岳部が輪かん、雪洞イグルーで、ルサ乗越より岬到着後、引き返して羅臼岳まで縦走している。2013 年の小谷君はこの記録を参考に企画した。知床の厳冬期と 3 月では、気候、積雪など極めて大きい差がある。岬よりの縦走隊員だった中島道郎が思い出すたびに言っている、あれは「世界最悪の旅」だった、との表現がすべてを語っていると思う。(写真 1)

3. 2013 年 3 月 雪洞とイグルーによる羅臼から岬まで主稜線縦走

同志社大学山岳会 小谷紘平

知床に強く惹かれたのは、岡山大学山岳部による 1965 年 3 月の知床縦走記録を読んだのがきっかけです。2008 年、同志社大三年生で山岳部リーダーとなり積雪期の知床半島を縦走するという課題を自らに課し、その年 9 月、半島南東側海岸を歩いて主稜線縦走後の帰路を確認した。冬山の経験を積むことを心掛けて、2009 年 2 月にはウトロからスキーで羅臼岳に登頂した。10 年 5 月にはカヤックで半島を一周、2011 年 3 月に知床岬までの縦走を計画したが東日本大震災のためやむなく断念、2012 年 9 月には泳ぎと徒歩で半島を一周するなど、いくども偵察をかさねた末、ついに 2013 年 3 月羅臼平から岬まで主稜線を 3 名で縦走、帰途は南東側海岸線の踏破に成功した。

2013 年 2 月 26 日～28 日

札幌から夜行バスでウトロまで行き、流水をながめつつイワウベツへ。そこから樹林帯をワカンジキで羅臼岳にむかったが、ラッセルに苦戦して登頂は諦め、羅臼平から三つ峰の鞍部に登り雪洞を掘って、翌日そこらよい岬へ、北に向かった。

3 月 1～3 日

さいわい地吹雪もなく、国後島や流水の景色を楽しみながら、三つ峰、知円別岳、東岳を縦走して、2 日ルサ乗越にくだる途中、標高 350 m 地点に雪洞をつくった。しかしこの雪洞は強風に削られたので、その奥に掘り進んだ雪洞で辛うじて難を避け、そこで唯一の滞在日を過ごした。樹林帯の蔭になるように設けた雪洞だが、これほどひどく消耗するとは予想しなかった。この日は北海道を 968 hPa まで発達した低気圧が通過、中標津の市街地では吹雪のため多くの人が亡くなった。

3 月 4～7 日

快晴だが風は強い。連日のハイマツまじりのモナカ雪のラッセルで、アルミ製ワカンの先端部が折れ、木の枝を添え木にタイラップで補修した。5 日知床岳登頂往復、雪が堅く快調に進み、ウイーヌプリ手前のなだらかな樹林帯で幕営。6 日はガスの中を北上、7 日朝、流水の海が見渡せるすばらしい天気の中、鬱蒼とした樹林にはいり、コンパス頼りに灯台を目指し、ついに岬に到達した。まるまると太ったエゾシカたちが走り回りこちらを見つめている。感無量。カブト岩などを高巻きして南下し、滝の下で幕営。

3月8～10日

以後はペキンノ鼻まではまとめて高巻き、船泊手前の岩場、メガネ岩手前の岩場通過は、転落すれば流水の上でたいそう緊張した。モレイウシで幕営準備中に北大山岳部にあった。翌日潮位が下がる時刻をまってモイレウシを発つが潮位がたかく海が荒れているのでタケノコ岩から引き返し、標高500 mまで高まきして、ウナイベツ川に下りて河口近くの樹林で幕営。10日早朝、観音岩をこえて、急な下りをバックステップで降りて相泊に到着した。

計画偵察から4年、時間がかかりすぎたが、私にとってそれだけ知床は怖かった。どこまで人間が経験し成長しても自然は想像を上回るものであり、だからこそ心惹かれるのだと思う。

4. 1952年12月 京大隊知床半島縦走の記録

知床隊員 寺本 巖

厳冬期知床の縦走時の隊員たちの労苦は大変だった。その様子を雪の山々と隊員の行動時の写真で紹介する。また極地法キャンプ地点は地図に示した通りである。

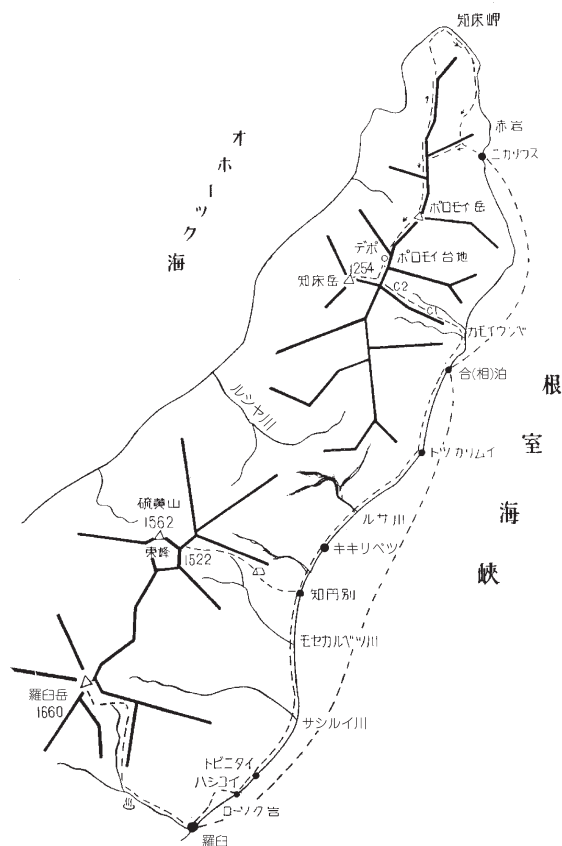
とりわけ数日間の荒天のあとで、やっと岬隊のテントを見つけたときは喜んだが、コールに対して縦走隊員の返事がなく、かれらの生存を確認できたときは無性に腹が立った。なぜ返事しなかったのだ！ 当時の隊員の集合写真を見てもらうが、隊長はじめ脇坂、山口、廣瀬たち隊員の多くが、ここにいないのはさびしい(写真2)。

なお最後に寺本が叔父上から借り出したムービーカメラ アイモで伊藤隊長が撮影したフィルム7分のCD録画の一部が映写された。天候が悪く岬より南のニカリウスで縦走隊員3名を上陸させ、すぐ離岸したときに大きく揺れる小舟で撮られた映像は緊迫感にあふれていた。

5. 知床縦走をふりかえる―世界最悪の旅―

知床隊員 中島道郎

知床山脈主稜線を覆っている雪原は、実は身の丈を越えるハイマツの藪の上に積った不安定な雪面で、下は洞になっている。雪を踏み抜いてその洞中に転落すると、そこから雪原の表面に出るのは至難の技である。まずスキーと荷物を、松の枝に宙ぶらりんになりながら外す。そして次は、それを何回かに分けて、密集するハ



知床半島概念図
(「山岳」48年より改変)

イマツの枝の間を潜らせ、頭上にあいた雪の穴の外に放り上げ、荷物を再梱包。それが終わった時にはもうくたくた。スキーをつけて再び歩き始めるとまた雪を踏み抜き、泣くに泣けない作業を再びしなければならない。

このような絶望的な作業を毎日繰り返しながら、1日も休まずに13日間行動し続けた。やがて予定日もかなり過ぎ、乾パン1日1枚と制限された。遊び心ではあるが遺書まで書いた。ある朝、コールが聞こえた。コールに直ぐに答えるのははしたないと藤村の指示で、応答しなかった。寺本がテントをたたき、必死の形相で、「生きているならなんとか言え」と叫んだ。辛抱たまらず「腹減った、乾パンくれー」。

知床の山は、もうこんな目には、金輪際、二度と再び遭いたくないと思ったほど過酷な山旅であった。



写真 2 知床隊集合写真



写真 3 冬の知床半島の山々
(左から羅臼岳、硫黄山、右端 知床岳 寺本巖撮影)

6. その後の知床に関連する話題

(1) 1959 年 3 月知床半島縦走

関西学院大学山岳部 OB 鮎川 滉

当初計画では、隊は 3 隊に分かれ、「羅臼隊」は羅臼岳から硫黄山を経てルサ川まで、「岬隊」は知床岬に上陸し、知床岳を経てルサ川まで、そして「本隊」はルサ川から知床岳をめざし、その間、羅臼隊と岬隊のサポートを任務とするというものであった。リーダー尾崎進以下 18 名（1 年生 3 人を含む）の態勢である。

羅臼隊は予定通りに計画をすすめたが、岬隊は本隊とともに、流水塊に阻まれ、コブカリコ

タン（ルサ川のすぐ北）に下船せざるを得ず、やむなく岬隊は本隊とともに知床岳に行き、そこから知床岬最先端を往復するという計画に変更した。岬隊、本隊は主稜線上にテントを進め、3 月 24 日 C4 から岬往復に成功した。また全員知床岳に登頂、羅臼隊も無事に縦走を成功させ、27 日に合流した。両隊ともきびしい寒さと強風、風雪に悩まされた。

(2) 1952 年以降の京大の冬期記録

上田 豊（記）

1957 年度に並河・谷・上尾が、羅臼岳から



写真 4 知床半島の最高峰羅臼岳の頂上（寺本巖撮影）

硫黄山往復を試みた（京大山岳部報告7号）。12月26日 羅臼温泉発、翌日羅臼岳登頂。12月31日 主稜線から硫黄山への分岐近くまで行ったが、リング・ワンデリング、悪天のため引き返す。1月4日 羅臼温泉帰着。

65年度冬山で個別の山岳部5山行の一つに羅臼岳～硫黄山縦走があった（報告14号）。栗田・上田L・筒井と2回生の北上田・渡辺・門脇。12月21日岩尾別発 23日羅臼岳登頂、28日硫黄山登頂し知円別へ。降雪少ないが強風で顔面凍傷1件。

7. ご挨拶 同志社大学山岳会 平林克敏
今日このようなかたちで、ナムナニ合同登山のように互いに競いつつ協力してきた京大学士山岳会と同志社大学の合同講演会が開かれたことは感慨深い。

私は次世代の教育のためのプロジェクトにも協力しているので京都の洛北高校にも行く。そこには前身京都一中卒業生としてノーベル賞受賞者の湯川さんたちとともに、今西錦司、西堀榮三郎、桑原武夫さんたちの写真が飾られている。生徒たちには先人たちのパイオニア精神とその成果を話すことにしているが、それを聞くと若い生徒たちの眼が輝く。私たちも先輩パイオニアたちの業績はもとより、自分たちが努力した日々の記録を、後進に伝える責務があるとおもう。今日の講演会はそういう意味でも有意義だった。

8. 閉会挨拶 知床隊員 平井一正
京大の知床登山がおこなわれた1952年冬は、今西錦司さんがマナスルの偵察を終えて帰国された直後で、まさにわが国戦後のヒマラヤ遠征の幕開けのときであった。実に絶妙のタイミングで、ヒマラヤ遠征のひな形でもある知床登山がおこなわれた。

知床で学んだ知識と経験は、その後のヒマラヤでの大きな自信となった。ヒマラヤの夢を育てた原点が知床にあった。いまやヒマラヤの未踏峰は少なくなったが、いろいろと切り口をかえてみるとまだまだ未知の世界は多い。知床の自然にふれた若い人が、知床を契機としてさらに新たな人生の夢をそだてていってもらえば、最高の喜びです。

最後に当時知床に目をむけて若手をリードし、今西さんたち先輩に現役の実力を見直させ、その後もヒマラヤ遠征の原動力として活躍された伊藤洋平隊長（1923－85年没）に感謝する。

なおこの知床登山に成功した年の秋にはAACKはネパールのアンナプルナⅡ峰に登山隊を送っている。5月に目標を決定し、7月にネパールから入国許可が来て、8月末に出発、短期間にすべての準備をととのえることができたのは、この知床での経験が大いに役立っていると思う。その後も知床の隊員が主力になってチョゴリザの初登頂に成功するなどヒマラヤで次々と初登頂を成し遂げている。その意味で知床の意義は大きい。

懇親会

講演会のあと同会場で田中昌二郎の司会で懇親パーティを開き、約 30 名が参加。斎藤惇生の乾杯にはじまり、日本山岳会関西支部宗實慶子、関西学院大学山岳部 OB 尾崎進、同志社大学山岳会会長大日常男、AACK 左右田健次各氏の半世紀以上も前を振りかえる興味あるスピーチを聞きながら歓談、松林公蔵会長のあいさつで閉会した。なお会場の後部パネルには、平井一正が保蔵する 1952 年 12 月末から毎日新聞に数回にわたって報道された知床縦走隊の記録と写真を拡大し、さる 50 年記念会開催時の羅臼町会場写真、羅臼岳登山の記念写真とともに展示した。

参考資料

A.A.C.K.・京都大学山岳部 (1953) 冬の知床

半島の山々「山岳」第 48 年 101-118

小谷紘平 (2014) 冬の知床半島縦走 山と溪谷 2014 年 3 月号 116 ~ 120

斎藤惇生 (2005 ~ 2006) 五三年前の厳冬期知床遠征をふりかえって

(その一) 発端と岬隊の記録. AACK Newsletter, 36, 1-5

(その二) 本隊の行動. AACK Newsletter, 37, 5-8

(その三) 第二次計画 知床五〇周年. AACK Newsletter, 38, 15-18

中島道郎 (2006) 知床岬→知床岳厳冬期初縦走—私の「世界最悪の旅」—. AACK Newsletter, 39, 9-10

岡山の山、2014 年晩秋の若杉原生林と日名倉山

永田 龍



写真 1 若杉原生林登山口



写真 2 日名倉山山頂

岡山のを登る会、通称 OKYAN の山行は 1997 年の会の発足以来毎年途切れることなく続いているという。最近は岡山の山に限らず、兵庫の山にも足を伸ばしている。会は、高村奉樹氏の発案、新井浩氏の協力で、会員とその夫人計 8 名で岡山県の名山、那岐山に登山をしたことをきっかけに生まれ、その後、参加者も毎年増えて一時は東京から九州まで 30 名近くにのぼったと聞いている。2001 年の泉山登山以

降は、OKYAN の名称の発案者でもある寺本巖氏と川崎徹氏、つづいて潮崎安弘氏が会の運営にあたってこられた。今回の山行でも大方のアレンジは川崎徹氏がされた。

縁があって、私と秋田雅規氏は、ここ数年 OKYAN の山行に参加しており、今回も 2014 年の岡山県西栗倉村山域の山行に参加した。西栗倉村は兵庫、鳥取、岡山 3 県の交わるところにあり、日本海と瀬戸内海のちょうど真ん中、

中国山地の東の端に位置する。もののけ姫の舞台にもなった中国山地は神代の時代より製鉄が盛んであったところであり、ここ西栗倉村にもタタラ製鉄跡が残っている。今は、森林を生かした産業が復興し、ふるさと再生に成功した村のひとつとして注目されている。

今回の山行の参加者は、平井一正、井上潤、青野敏幸、同夫人、新井浩、同夫人、川崎徹、同夫人、高村奉樹、川嶋真生、潮崎安弘、高野昭吾、上尾庄一郎、井関祥浩、秋田雅規、永田龍、といつもながら平均年齢はかなり高い。

2014年11月8日（曇り）

10時20分に智頭線大原駅に集合し、この晩宿泊するあわくら荘の送迎バスに乗って、一旦宿に立ち寄り余分な荷物を置いた後、そのまま若杉原生林登山口に向かった。若杉原生林は西栗倉村の北東約10kmのところであり、若杉峠一帯の尾根と沢筋に名前の通りの杉の自然林とブナ、ミズナラ、カエデなどの広葉樹林が広がっている。登山口は標高900mにあり、ここで、全員で準備体操をして若杉峠1100mを目指す。冬も近づき落葉が進んでいるけれども、幾つかのカエデはまだ紅葉が美しい。沢筋を進み、1時間ほどで若杉峠に到着、ここで昼食を摂る。遠く東に氷ノ山、すぐ横に三室山が横たわっている。南には明日登山予定の後山（1345m）も見える。ここで、遅れてきた3名も合流し参加者全員が揃う。起伏に富んだ尾根筋を散策しながら登山口に戻る。全員で記念写真を撮った（写真1）。

夕食後、この年の夏にご逝去された故薮内ラショーさんを偲び、テレビ技術の進歩に特別の貢献があったものに送られるエミー賞の受賞者で、また、ノーベル物理学賞を受賞された赤崎教授の盟友でもある寺本巖氏渾身の力作「ラショーさんを偲ぶ」DVDを上映した。この日のため、故薮内卓男夫人の和子様も鳥取から駆

けつけて来られ、涙を浮かべておられた。

11月9日（雨）

今日は朝から雨で回復も望めない。早々に後山登山を諦め、もともと体力に自信のない方々用に計画していた、後山の南西約4kmにある日名倉山（1047m）に全員で登ることとした。8時30分、宿の送迎バスに乗り、日名倉山の北方の志引峠（674m）登山口に向かった。日名倉山登山そのものは、OKYANとしては3度目となるが、このルートは初めてという。登山口からは概ね植林の杉林か伐採地跡を進む。若杉原生林とは随分趣が異なる。登山道も所々台風の影響で荒れている。樹林帯を抜けると上部は笹原になっており、見通しが良い。谷を挟んだガスの向こうに後山が見える。10時半頃に頂上に到着したけれども冷たい雨も降りつづき、早々に直下のベルピール自然公園（865m）に向かって下山する（写真2）。ここには巨大な結婚式場があり併設の喫茶店で暖かいコーヒーで暖をとることもできるだろう。30分ほどで自然公園に到着したけれども、期待に反し喫茶店も閉まっており、雨をしのぐ屋根もない。雨脚はますます強まってくる。携帯で宿の送迎バスにすぐに迎えに来てもらうようお願いし、昼には宿に戻ることができた。温泉に入って体を温め、全員無事下山を祝って乾杯をした後、三々五々解散した。

平井一正氏、高村奉樹氏と私は、帰りに大原駅近くの、梅里雪山で亡くなられた船原さんのご両親のお住まいに伺い、ご焼香の後、しばらく歓談した。

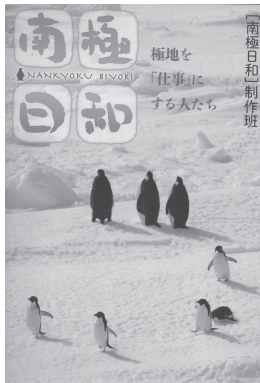
OKYANの主要メンバーも高齢化が進み、多くは山登りも覚束なくなってきた。来年からは今までと同じような山行を続けるのは難しいかもしれない。

書評

「南極日和」 実業之日本社、2014 年 5 月発行 197 頁

本体価格 1700 円 + 税 ISBN 978-4-408-11066-0

平井一正



本書は 2010 年から 2014 年まで全 182 回、BS 朝日で放映されたものをまとめたものである。22 人の隊員が 6 分くらいの放送時間にしゃべった内容がひとり約 5 ページほどにまとめられているが、読みやすく肩のこらない読み物になっている。なによりも最近の南極事情がよくわかる。

第一章「南極観測ナビ」では、南極の紹介、南極観測の歩み、基地における活動、観測隊員になるには、などがわかりやすく解説されている。

第二章「観測する人たち」では、オーロラ、気象、地球物理、隕石、雪氷、地学、生物、地質、気水圏などの分野で観測、研究などの意義、苦心談、エピソードなどがある。第一回の越冬隊員である村越隊員はじめ、数次にわたって南極に行った隊員など、種々の観測業務に当たったの苦心談など興味ある話がある。AACK 会員である上田豊氏はこのうち、雪氷の部で登場する。本書でとりあげられた唯一の AACK 会員である。

第三章「観測を支える人たち」では、建築、調理、庶務、医療、設営などに携わる人の話である。

観測や研究に当たる隊員の仕事は大体想像もつくが、この章で書かれている観測を支える隊員の多彩なことにおどろく。現地から日本にむけて南極のことを伝える任務をもつ教育担当の隊員や、いろいろと人を動かすマネジメント

をする庶務の仕事をする隊員など、昔は考えられなかった任務をもつ隊員などが活躍している。リピーターも多い。1987 年夏隊以後女性隊員も参加しているので、女性隊員も解説に登場する。

一読して南極も変わった、という印象が強く、出身母体もさまざまな、多彩な隊員をまとめていくのも大変な仕事である、ということが印象に残る。しかしほぼ全員が、南極によって人生が変わったと南極のすばらしさや夢を語り、チームワークを支えているのは、さわやかな読後感を与える。

この機会に南極事業がはじまったときのことを書いておきたい。

私が大学院修士課程を修了した 1956 年は、まさに南極観測の幕開けの年であった。永田隊長、西堀副隊長以外はまだ隊員も決まっていなく、この年の 3 月、隊員選考も兼ねて乗鞍岳で大規模な合宿が行われた。全国から希望者が集まった。AACK からは西堀さんはもちろんのこと、中尾佐助、伊藤洋平、山口克、川口章、北村泰一、平井一正などが参加した。永田、西堀の目にとまるように、関東の大学山岳部の猛者に混じって、精一杯活躍した。文部省から参加費が支払われたが、思ってもみなかったことで山口以下は受領を拒否した。今から思うとストイックであった。取材の中日新聞のヘリコプターが墜落して、乗組員全員が死亡するという事件は記憶に生々しい。

当時海外に出かけるということはむづかしく、ヒマラヤへの夢は実現するかどうかは混沌としていた。パイオニアワークをめざす若者は南極プロジェクトに飛びついた。当時は南極探検と言われていて、南極にかける情熱は現在では想像もつかないものであった。

本書を読むと、昔南極に対して持っていたわくわくするような憧れや越冬に対する悲壮感はいま感じられず、時代の経過と科学の進歩をいまさらながら認識する。

会員動向

訃報

松尾 稔会員

原稿募集のお知らせ

編集人

2015年5月9日、松尾 稔会員が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

松尾会員は、1969年の京都大学ブータン学術調査隊で隊長を務められました。多くの会員からご逝去を惜しむ声が寄せられておりますので、AACK Newsletterでは、8月末発行予定の次号、第74号で、松尾会員の追悼と、1969年の調査隊に関する話題を特集したいと思います。皆様にはふるって原稿をお寄せください。

原稿締め切りは7月16日、送り先は編集人・横山宏太郎です。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、1969年調査隊の写真と帰国報告書が、「京都大学ブータン友好プログラム」ホームページに掲載されています。URLは以下のとおりです。ご参考まで。

<http://www.kyoto-bhutan.org/ja/history/1969.html?0518>

第 33 回雲南懇話会のお知らせ

前田栄三

1. 日時；2015 年 6 月 27 日（土）13 時～17 時 30 分。茶話会；17 時 30 分～18 時 40 分。
2. 場所；JICA 研究所国際会議場（東京・市ヶ谷）
3. 内容；講師、演題など変更ある場合は、ご了承をお願い致します。

- ①「積雪期の知床半島縦走、2013 年 2～3 月」
ー近年の山岳部活動の様子も紹介！ー
同志社大学山岳部（当時 4 回生）山口 尚紀
（当時 3 回生）齋藤慎太郎
【参考】「流水～知床岬から縦走、1971 年 3 月」
京都大学山岳部（当時 3 回生）山岸 久雄

- ②「ブータンにおける学校教育の歴史的変遷」
ー学校教育 100 年史ー
早稲田大学教育・総合科学学術院
教育総合研究所助手 平山 雄大

- ③「中央アジアの山国 タジキスタン、美しい自然と暮し」
ーパミールの遺跡を中心にー
長距離サイクリスト、日英会議通訳、
パミール・中央アジア研究会理事
井手 マヤ

- ④「納豆の起源」
ー照葉樹林帯を横断、納豆文化の多様性を追うー
名古屋大学大学院環境学研究科教授
横山 智

- ⑤「東南アジアの環境変動とサルの進化」
ー500 万年の化石記録を読み解くー
京都大学霊長類研究所教授、AACK
高井 正成

編集後記

予定より少し遅れてしまいましたが、第 73 号を発行することができました。原稿をいただいた皆様、ありがとうございました。

4 月 25 日、ネパール東部を震源とする大地震があり、周辺各国を含め大きな被害がありました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々にこころよりお見舞い申し上げます。

被害状況の一部を知っただけでも、復興にはかなりの時間がかかるものと思われますので、息の長い支援が必要でしょう。

ネパールと日本の間には、登山や学術研究はもとより、技術や経済の分野も含め長い交流の歴史があり、当会会員も大勢の方々が関わってこられました。また日本には、地震防災・復興についての知識・技術が豊富に集積されています。それらが着実な復興に役立つことを願っています。

5 月には、1969 年京都大学ブータン学術調査隊の隊長、松尾 稔会員の訃報が伝えられました。計画が動き始めた 1968 年当時 2 回生だった私は、隊の事務局員としてお手伝いしました

が、力強く計画を牽引される姿が印象的でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

このことに関連しての原稿募集を本号に掲載していますので、よろしくお願いいたします。

次号締め切りは宵山の日、コンチキチンとともに、暑い中での夏合宿の準備も思い出します。

横山宏太郎

発行日 2015 年 6 月 10 日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究 2 号館 4 階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町 1-8
（株）土倉事務所